

薬学生の東日本大震災ボランティア活動参加に関する意識調査とその関連因子の解析

著者	小武家 優子, 吉田 健, 吉武 毅人
雑誌名	第一薬科大学研究年報
号	28
ページ	9-15
発行年	2012-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1154/00000004/



原著

薬学生の東日本大震災ボランティア活動参加に関する
意識調査とその関連因子の解析

第一薬科大学 臨床薬学講座 社会薬学分野
小武家 優子, 吉田 健, 吉武 毅人

Survey of awareness and analyses of related factors to volunteer activities of pharmacy students after the Great East Japan Earthquake

Department of social pharmacy, Daiichi University of Pharmacy, 22-1 Tamagawa-cho,
Minami-ku, Fukuoka, 815-8511, Japan

Yuko KOBUKE, Takeshi YOSHIDA, Taketo YOSHITAKE

Corresponding Author

Tel: 092-541-0161. Fax: 092-553-5698. E-mail: y-kobuke@daiichi-cps.ac.jp

Abstract

The Great East Japan Earthquake occurred on March 11, 2011. At the time of the earthquake, pharmacist and pharmacy students engaged in volunteer activities such as providing disaster medicine and relief supplies to disaster areas. Questionnaire survey for pharmacy students were carried out in order to clarify awareness to volunteer activities for disaster areas and to use data as a basis of Service-Learning in the 6 years pharmacy education. We divided subjects into pharmacy students those would like to participate in volunteer activities and pharmacy students those would not like to participate in volunteer activities and compared survey item. The percentage of those who had, the necessity of volunteer activities, motivation for learning of volunteer activities, evaluation of pharmacy students' volunteer activities, motivation for participation of volunteer activities after taking pharmacist license in the future, knowing pharmacy students' volunteer activities in male students, among pharmacy students those would like to participate in volunteer activities was significantly higher than among pharmacy students those would not like to participate in volunteer activities.

Results of this study showed that information service of pharmacy students' volunteer activities and real experience of volunteer activities was useful for heightening motivation of participating in volunteer activities.

Keywords—the Great East Japan Earthquake; pharmacist; pharmacy students; disaster medicine; volunteer activities; Service-Learning

諸言

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、被災者の薬を取り巻く環境に関する医療支援として、薬剤師の活動が注目された¹⁻²⁾。また今回の東日本大震災では、被災地への支援物資の仕分け作業に薬学生が協力する³⁾など、阪神大震災以降、大学生のボランティア活動について関心が高まっている⁴⁾。アメリカでは、ボランティア活動経験を通じたサービス・ラーニングが大学教育において行われている⁵⁾。カリフォルニア大学バークレー校では、サービス・ラーニングとは、「学生が理論として学んだことを地域社会のなかで実現化するための教科のひとつであり、また、地域社会のニーズなどの真の状況を学術的に置き換えつつ、それら地域社会の問題を解決したり、人々や社会に指摘したりする過程」であると定義されている⁵⁾。ジョージ・ワシントン大学では、ボランティア活動を志望する学生と地域のニーズを需要調整しマッチングする機能を備えている⁵⁾。またジョージ・メイソン大学では、サービス・ラーニングの導入方法を、自主企画コース(教員の監督のもとで、学生自身が企画して学習する。地域の現場で活動することが原則で、単位を習得することができ、長期休暇の活用も可能である。)や選択コース(教授の判断で、文献を読んで学習するか、サービス・ラーニングを行って経験学習するかを、学生が選択することができる。)として大学教育で行っている⁵⁾。国内では主に国際分野におけるサービス・ラーニングが大学教育で行われているが⁶⁾、薬学部におけるサービス・ラーニングの取組みは少ない。

本研究は、本学薬学生を対象に、薬学生の東日本大震災も含めたボランティア活動に関する意識を調査し、今後の薬学6年制教育におけるサービス・ラーニングに関する基礎資料とするために行った。

方法

2011年6月に、本学3年生及び4年生の講義に出席した229名のうち、回答を得た215名(回収率93.6%)より、有効回答数202名(回答率88.2%)を対象とした。方法は、自記式質問紙調査にて実施した。調査項目は、『ボランティア活動全般に関する意識』(ボランティア活動経験、被災地ボランティア活動の必要性、ボランティア活動の学習意欲)、『薬学生の東日本大震災におけるボランティア活動に関する意識』(薬学生のボランティア活動認識、学生のボランティア活動の評価、ボランティア活動の参加意欲)、『薬学生から見た薬剤師の東日本大震災におけるボランティア活動に関する意識』(薬学師のボランティア活動認識の有無、薬剤師免許取得後のボランティア活動の参加意欲)である。

調査項目の『薬学生の東日本大震災におけるボランティア活動に関する意識』のうち、「ボランティア活動の参加意欲」について回答したものを、「是非参加したい」及び「短期間であれば参加したい」を『参加意欲あり群』、「参加したくない」を『参加意欲なし群』の二群に分けて解析した。参加意欲の有無別の比較において、 χ^2 検定を行った。さらに、『薬学生の東日本大震災におけるボランティア活動に関する意識』において、「薬学生及び薬剤師のボランティア活動認識」の有無別に対象群を分け、「ボランティア活動の参加意欲」の有無別に、「ボランティア活動経験」の有無を比較し、 χ^2 検定を行った。統計解析は、統計解析ソフトSPSS(18.0版)を使用した。

結果

対象者の属性として、性別の男女比は同程度(男性:102名、女性100名)であった。『ボランティア活動全般に関する意識』において、「被災地ボランティア活動の必要性」があると答えた人の割合は、96%と高かった。しかしながら、「ボランティア活動の参加意欲」がある人の割合は、55%と低かった[図1]。

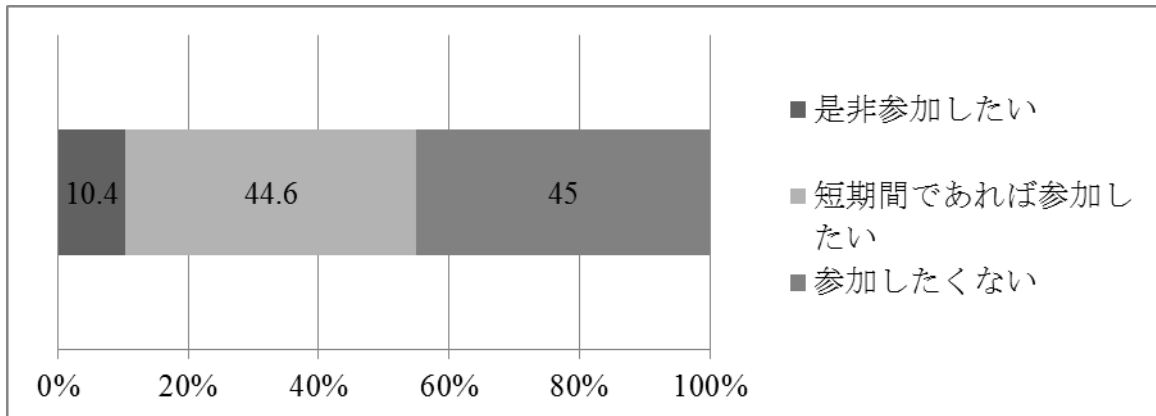


図1 ボランティア活動の参加意欲

次に、ボランティア活動の参加意欲の有無別の比較をした[表1]。

表1 ボランティア活動の参加意欲の有無別の比較 (χ^2 検定)

	参加意欲あり群	参加意欲なし群
ボランティア活動の必要性	100%	91.1%**
ボランティア活動の学習意欲	87.2%	37.5%**
学生のボランティア活動の評価	67.9%	34.4%**
薬剤師免許取得後の		
ボランティア活動の参加意欲	97.3%	39.8%**
薬学生のボランティア活動認識	35.1%	27.5%
薬学生のボランティア活動認識(男性)	42.6%	23.6%*
薬剤師のボランティア活動認識	64.9%	54.9%
ボランティア活動経験	68.5%	58.2%

**： $p < 0.01$ ， *： $p < 0.05$

「ボランティア活動の必要性」において、参加意欲あり群(100%)では、参加意欲なし群(91.1%)よりもボランティア活動の必要性の認識が、統計学的に有意に高かった($p < 0.01$) [表1]。「ボランティア活動の学習意欲」において、参加意欲あり群(87.2%)では、参加意欲なし群(37.5%)よりもボランティア活動の学習意欲が、統計学的に有意に高かった($p < 0.01$) [表1]。「学生のボランティア活動の評価」において、参加意欲あり群(67.9%)では、参加意欲なし群(34.4%)よりも学生のボランティア活動の評価が、統計学的に有意に高かった($p < 0.01$) [表1]。「薬剤師免許取得後のボランティア

活動の参加意欲」において、参加意欲あり群(97.3%)では、参加意欲なし群(39.8%)よりも学生のボランティア活動の評価が、統計学的に有意に高かった($p < 0.01$) [表1]。「薬学生のボランティア活動認識」において、参加意欲あり群(35.1%)では、参加意欲なし群(27.5%)よりも薬学生のボランティア活動認識が高かったが、統計学的な有意差は認められなかった($p = 0.244$) [表1]。「薬学生のボランティア活動認識」において、さらに男女別に解析したところ、男性にのみ、参加意欲あり群(42.6%)では、参加意欲なし群(23.6%)よりも薬学生のボランティア活動認識が、統計学的に有意に高かった($p < 0.05$) [表1]。「薬剤師のボランティア活動認識」において、参加意欲あり群(64.9%)では、参加意欲なし群(54.9%)よりもが薬剤師のボランティア活動認識が高かったが、統計学的な有意差は認められなかった($p = 0.151$) [表1]。「ボランティア活動経験」において、参加意欲あり群(68.5%)では、参加意欲なし群(58.2%)よりもがボランティア活動経験のある人の割合が高かったが、統計学的な有意差は認められなかった($p = 0.132$) [表1]。

加えて、『薬学生の東日本大震災におけるボランティア活動に関する意識』において、「薬学生及び薬剤師のボランティア活動認識」の有無別に対象群を分け、「ボランティア活動の参加意欲」の有無別に、「ボランティア活動経験」の有無を比較した。薬学生のボランティア活動認識有群の「ボランティア活動経験」において、参加意欲あり群(76.9%)では、参加意欲なし群(56%)よりもボランティア活動経験のある人の割合が統計学的に高い傾向があった($p < 0.1$)。一方、薬学生のボランティア活動認識無群の「ボランティア活動経験」において、参加意欲あり群(63.9%)では、参加意欲なし群(59.1%)よりもボランティア活動経験のある人の割合が高いものの、統計学的な有意差は認められなかった($p = 0.563$)。

同様に、薬剤師のボランティア活動認識有群の「ボランティア活動経験」において、参加意欲あり群(69.4%)では、参加意欲なし群(62%)よりもボランティア活動経験のある人の割合が高いものの、統計学的な有意差は認められなかった($p = 0.392$)。一方、薬剤師のボランティア活動認識無群の「ボランティア活動経験」において、参加意欲あり群(66.7%)では、参加意欲なし群(53.7%)よりもボランティア活動経験のある人の割合が高いものの、統計学的な有意差は認められなかった($p = 0.235$)。

考察

1. 薬学生のボランティア活動への参加意欲向上のための方策

被災地のボランティア活動について、9割以上(96%)の学生が必要を感じているものの、ボランティア活動への参加意欲は5割程度(55%)と低くなっていた[図1]。

参加意欲の有無別の比較[表1]において、統計学に有意差があったのは、ボランティア活動の必要性を認識していること、ボランティア活動の学習意欲があること、学生のボランティア活動の評価が高いこと、薬剤師免許取得後のボランティア活動の参加意欲が高いこと、薬学生のボランティア活動の認識があること(男性のみ)の5項目であった。ボランティア活動の参加意欲が高い学生は、ボランティア活動の必要性を認識し、ボランティア活動の学習意欲も高く、学生のボランティア活動に対する評価が肯定的であり、特に男性においては自分達と同じ薬学生のボランティア活動の認識があり、将来自分がなる薬剤師の免許取得後のボランティア活動の参加意欲においては、性差なく参加意欲が高く、将来的な展望を持って、今回の震災をとらえていると

考えられた。

『薬学生の東日本大震災におけるボランティア活動に関する意識』において、「薬学生及び薬剤師のボランティア活動認識」の有無別に対象群を分け、「ボランティア活動の参加意欲」の有無別に、「ボランティア活動経験」の有無を比較した。結果として、薬学生のボランティア活動の認識の有無別にみると、認識している群のみ、参加意欲あり群(76.9%)では、参加意欲なし群(56%)よりもボランティア活動の経験のある人の割合が統計学的に高い傾向があった($p < 0.1$)。すなわち、「薬学生」がボランティア活動を行っていることを認識していて、ボランティア活動の経験があれば、参加意欲が統計学的に高くなる傾向があることが分かった。他方、「薬剤師」がボランティア活動を行っていることを知っていても、ボランティア活動経験と合わせてもボランティア活動の参加意欲を有意に高めることはないことが分かった。早期体験型学習の学生を対象としたアンケート調査の報告⁷⁾によると、見学主体の実習のみに比べ、体験型、成果報告型実習では高い満足度が得られることが確認されていることから、ボランティア活動においても実際のボランティア活動を経験させることが重要であると考えられた。

今回の本研究の結果より、薬学生のボランティア活動への参加意欲を高めるためには、薬学生が行っているボランティア活動の実態を情報提供して認知させる形態の学習を行うこと、及び、認知させたいうえで実際のボランティア活動を伴う形態の学習を行うことが重要であると考えられた。

2. 震災ボランティア活動経験を通じたサービス・ラーニング

ボランティア学習の構成要素として、自己への探求、社会問題の理解、学習成果の応用があげられ、アメリカのボランティア活動推進機関であるポイント・オブ・ライト財団によると、「ボランティア活動」とは、活動者の主体性が最大限に尊重された、市民による他者へのサービス提供を目的とした民間・非営利の活動であると定義されている⁵⁾。サービス・ラーニングは、社会への貢献と学習効果の相互のバランスのうえに成立する学びであるとされ、同様に、ポイント・オブ・ライト財団によると、「サービス・ラーニング」とは、ボランティア活動のもつ社会的役割や自己啓発への力を認識した上で、意図的に人間やコミュニティが必要とする状況を作って、学生がアカデミックな学問を社会への貢献を通して学び深めるための、互酬的な経験学習であると定義されている⁵⁾。今回の東日本大震災において、被災地への支援物資の仕分け作業協力といった薬学生のボランティア活動³⁾は、薬学部における大学教育におけるサービス・ラーニングの可能性の一つであると考えられた。

アメリカのボランティア活動推進機関であるポイント・オブ・ライト財団によると、大学生と地域とを結ぶ中間機関と言われるボランティア・センターが社会的な役割を果たしている⁵⁾。日本においてはこのような役割は、地域の社会福祉協議会にあり、大学生のサービス・ラーニングを行う場合に活用が考えられる。ジョージ・ワシントン大学では、サービス・ラーニングの学習先は、公立学校、低所得者用診療所、高齢者福祉施設などである⁵⁾。国内の薬学部においては、学校薬剤師のいる学校、路上生活者のシェルター、在宅医療の訪問服薬指導が行われる高齢者福祉施設といった地域活動が考えられる。

アメリカのジョージ・メイソン大学では、サービス・ラーニングの導入方法を4つ

のカテゴリー(自主企画コース、選択コース、スタンダード・コース、必修コース)に分けて大学教育に位置づけている⁵⁾。必修コースにおいては、サービス・ラーニングが、学部によっては、学生全員が必修となっていて、教科の学習メニューのなかにすでに用意されている。このように初年次においては、大学において、「ボランティア論」などを学ぶ講義を提供し、スタンダード・コースで実際に活動経験を行い、選択コースでは、文献学習などの高次の知識を得たり、さらにサービス・ラーニングを行って経験学習を深めている。そして、最終的には自主企画コースのように、卒論のテーマに地域でのサービス・ラーニングを行えるような形態がとられている。

ここで、改めて、震災ボランティア活動経験を通じたサービス・ラーニングに関する可能性を考察してみる。

阪神淡路大震災からの教訓を踏まえた災害時における学校薬剤師の役割とその必要性の報告⁸⁾より、災害時に避難所となる学校において、災害時に期待される学校薬剤師の活動内容として、医薬品の管理や供給よりも学校や地域の環境衛生管理が多かったことが分かった。新潟中越地震での災害医療活動から医療活動の中で、慢性疾患に対する投薬希望者が多かった報告がある⁹⁾。残念ながら阪神淡路大震災や新潟中越地震での教訓が、東日本大震災で十分活かせていない状況があった。震災時に必要な認知内容として、学校や地域の環境衛生管理の必要性や慢性疾患に対する薬学的な健康教育や慢性疾患そのものの予防活動の必要性が考えられた。よって、被災地への支援物資の仕分け作業のような実際の震災ボランティア活動を行う前に、地域の環境衛生管理や健康予防教育の必要性といった認知内容を、薬学生の学習内容とする必要があると考えられた。薬学生や薬剤師にとって、災害時には、地域のニーズを踏まえた公衆衛生活動が必要であり、このような活動は、震災ボランティア活動経験を通じたサービス・ラーニングのテーマとして考えられた。

3. 本学における薬学生のボランティア活動を通じたサービス・ラーニング

本学におけるサービス・ラーニングを考える場合、全体プログラムである1年生の早期体験学習においてボランティア活動の知識学習や単発の活動経験を行い、研究室配属後の4年生以降に卒論作成も踏まえた文献収集や中長期的な活動体験を卒論のテーマにしながら、地域における薬学生の公衆衛生活動(コミュニティー・サービス)としてのサービス・ラーニングの可能性が考えられた。

以上のことより、薬学部の大学教育において、薬学生がボランティア活動を行っていることを情報提供したうえで、実際のボランティア活動体験の機会提供をすることが、薬学生におけるボランティア活動を通じたサービス・ラーニングとして重要であることが示唆された。

引用文献

- 1) 一般社団法人 日本病院薬剤師会, 日本病院薬剤師会雑誌, 47(9):1115-1145(2011)
- 2) 日本社会薬学会, 社会薬学, 30(1):9-26(2011)
- 3) 横浜薬科大学ホームページ, NEWS&TOPICS 被災地への支援物資の仕分け作業に本学の教員・学生協力」2011.03.22「横浜薬科大学の学生らが厚労省、薬剤師会、メーカー団体らによる支援活動にボランティア参加」
<http://www.hamayaku.jp/news/index.html?id=14611>, (2011年12月25日アクセス可)

能)

- 4) 佐々木正道, 大学生とボランティアに関する実証的研究, ミネルヴァ書房, 189-219(2003)
- 5) 財団法人 内外学生センター, 学生のボランティア活動に関する調査研究報告書 (平成 11 年 3 月), 42-51(1999)
- 6) 国際基督教大学 サービス・ラーニング・センター, サービス・ラーニング研究 シリーズ 3 サービス・ラーニングへの誘い, 16-25(2007)
- 7) 酒井英二, 早期体験学習としての救命講習並びに福祉体験学習の実施とその評価, YAKUGAKU ZASSHI, 128(8):1227-1233(2008)
- 8) 中川尚美, 災害時における学校薬剤師の役割とその必要性—阪神淡路大震災からの教訓を踏まえて—, YAKUGAKU ZASSHI, 128(9):1285-1291(2008)
- 9) 前村道生, 新潟中越地震での災害医療活動を経験して, 群馬県救急医療懇談会誌, 2:33-34(2006)